

Okely, Judith 2012 *Anthropological Practice: Fieldwork and the Ethnographic Method*. Berg Publishers.

(ジュディス・オークリー『人類学的実践：フィールドワークと民族誌の方法』、第一章「理論的および歴史的概要」(pp.1-25)より抜粋)

本書の目的：民族誌的フィールドワークにおける可能性と創造的な潜在性について p.2

- ・ 人類学はこれまでほとんど自身の研究の質の担保となる参与観察という方法についてほとんど語ってこなかった。個人的なフィールドワークの経験やそれについての説明は大量にある。しかし、システマティックな方法論としてはまとめられてこなかった。
- ・ その理由としては、標準化を嫌うという人類学の特徴がある。
- ・ 人類学では、フィールドワークにおいて人類学者が直面する予期せぬ事態にも開かれているべきであることが当然とされる。人類学者の学問文化的な文脈によって事前に作られた問いを排除し、フィールドワークの中で対象となる人々自身の関心を取り上げるということを重要視してきた。この意味で社会科学に支配的な仮説の検証というモデルに挑戦する。 p.4
- ・ フィールドワークは[あらかじめ規定されているという含みのある]実施する (to conduct) というよりも、体験する (to experience) といったほうが正しい。人類学者は、参与観察者、調査者、書記官、分析者であり、また著者の役割を統合している。 p.5
- ・ 以上の様な理由から英国でも北米の大学院でもフィールドワークの方法に関する講義はなかった。 p.6

方法論の要請と政治の関係

今では英国や北米の大学でも方法の授業が行われているが、これは当初は政治的な懐疑論への応答である。社会科学は長らく、その信頼性を証明するという圧力にさらされてきた。

- ・ ハードサイエンス（物理や化学）／ソフトサイエンス（社会科学や人間科学）
この対立の中に、さらに細かいヒエラルキーとして、「物理学の羨望 physics envy」
（＝よりソフトな科学への嘲笑）があらゆるレベルで存在する。 p.7

80年代前半に社会学が政治的右派によって共産主義や「非臣民」と結びつけられた。サッチャーは英国社会科学研究会議 (Social Science Research Council) を廃止しようとした。反対もあったため廃止は免れたものの、名称から「科学」を取り、経済社会研究会議 (Economic and Social Research Council) へと改変した。

弱体化した ESRC は「移転可能なスキル」を訓練するという一方で、自らの「有用性」を証明する必要があった。そこで、英国のすべての社会科学が、汎用的な方法のトレーニングに従属させられるようになった。実践ベースの人類学に、こうした状況に対する準備はなか

った。

ただし、質的研究を量的研究への従属とみる見方はすでに存在していた。理論社会学者は別として、サーベイ調査を特権視する社会学者は、方法を授業するなかで、一般化のための「再現可能性」の優位性や、「汚染」¹の危険、数的多数性という理想に訴えてきた。

社会科学の実証主義が科学的実践の諸側面をあいまいに反復しているに過ぎないということは皮肉である。科学者もまた人類学者と同様に偶然や事故の役割を利用している。p.9

仮説の検証は量的調査と結びついてきた。同時に、質的調査における仮説構築能力も主張されてきたが、政府の資金拠出からは見過ごされてきた。

- ・ 70年代～80年代にはポパー的な反証主義の科学モデルが学術助成申請書の様式となった。
- ・ 90年代になると、申請書の様式のなかで、リサーチクエスションは変更可能な形式になった。ただし、それは検証モデルから適用可能性 (relevance) や、富の創造へと置き換えられたのだった。

そこで、学術助成では「有用性」が求められるようになった。人文系予算も減らされ、ビジネスへと振り分けられるようになった。研究は短期間で成果をあげることが求められ、研究計画も入念に行うことが求められる。しかし、これは人類学にはなじまない。p.10

科学観

かつて、オーギュスト・コントは人間社会でも普遍法則が研究されるべきと主張していた。しかし、その後、人類学者のエヴァンス・プリチャード (Evans-Pritchard, E 1962 *Essays in Social Anthropology*, London: Faber and Faber.) は人間の行動についてそれは不可能だと主張していた。

- ・ 反証や再現可能性に重きをおく科学観もあるが、人類学ではそのことに時間を浪費しない。人類学は事例に関するより良い説明には常に開かれている。人類学者は他の人類学者のデータを使うこともある。それは自分の仮説の検証を補足するというためではなく、暫定的であるとはいえ、洞察力のある比較や対照を示すという目的である。p.11

¹ 正確な測定のために分けなければならないデータが、サンプルの人の動きで混じってしまうこと

信頼性について

人類学者のフィールドワークに基づいた研究は、計測の手続き、再現可能性、数的指標と結びついた意味での信頼性が低いとみなされる。しかし、こうした基準は、単一の地理的、政治的領域を対象としたサーベイを想定したものであり、地図横断的に差異や類似性を探究する人類学の問いにはなじまない。p.12

数字が不要な場合

システムが明らかになっていないと、量的調査のためのカテゴリも作成できない。

- ・ 人類学者のエドモンド・リーチはかつて、スリランカの一つの村における土地相続の仕組みを丹念に調査することで、それ以前に 57 の村を対象とした統計調査では見過ごされてきた指標があることを指摘した。p.13

中立性

調査者が対象に影響を与えるべきでないという意味での中立性は人類学では不可能。

- ・ サーベイ調査では重複は「汚染」として問題となるが、人類学者は同じフィールドで同じインフォーマントに何度も話を聞くこともある。p.14

「現実」の問題

人類学では、ポストモダニズムやポストコロニアル批評の影響から、「表象の危機」が叫ばれるようにもなった。認識論的な問題だけではなく、調査を行うという政治的な文脈も問題化されるようになった。このような趨勢で、フィールドワークの経験を自伝的なやり方で提示するといった、実験的民族誌も試みられているようになっている。p.15

民族誌の定義

社会学では「民族誌」は象徴的相互作用論という特定の理論と結びついている。それに対し人類学では、フィールドワークに基づいて書かれたモノグラフが民族誌と呼ばれ、そこで用いられる理論は多岐にわたる。

- ・ 実証主義者からは、民族誌は分析のない単なる記述と格下げされることもある。しかし、記述については常に理論的関心と結びついた選択が働いているため理論と記述は不可分であるのだ。p.16

全体論

初期の人類学において、事前にトピックや焦点を前もって定めることは不可能だった。そのため、あらゆることを記録する必要があった。また、文献研究を踏まえても、フィールドワークでは、それとは異なる現実直面するため、あらかじめ立てていた仮説も置き換えられる。別の機会に再びフィールドワークを行ったり、後から再び分析が行われたりすること

もある。p.19

質的調査への期待の高まり

皮肉なことに、新自由主義の下で、マジョリティーを対象とした大規模調査も減少し、失業統計や貧困レベルを減少させる必要から、特定の人々を対象とした質的調査が強調されるようにもなった。また、9.11以降はインテリジェンス分野でも質的調査へのニーズが高まっている。p.24